

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成 21 年度派遣報告書

—— (ケニア・ナイロビ大学、ソマリ語、派遣期間 (H21. 8. 15-H22. 1. 15)) ——

平成 21 年度入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

楠 和樹

#### 自身の研究テーマについて

私の研究は、ケニア北東州へのソマリアからの難民の流入が地域社会に与える政治的、経済的、社会的影響を解明することを目的としている。

ソマリアでは、1991 年のシアド・バーレ政権の崩壊以降現在にいたるまで政情の不安定化が継続している。そのため、毎年多くの人びとがケニアを含む周辺国に避難している。ケニアには現在ダダーブとカクマに難民キャンプが設置されており、とくにソマリアの国境から近いところにあるダダーブでは、その収容能力の限界を大幅に越える数の人びとが生活し、国際社会の支援を受けている。半砂漠地帯の荒野に突如として出現した、30 万人を越える人口を抱えるキャンプの存在は、地域社会に対して直接的、間接的に影響を与えていると考えられる。私の研究は、ダダーブの難民キャンプをその内部に含むラガデラ県において地域住民と難民にかかわる現象とのかかわりに焦点をあてることで、地域の難民化現象の実態を明らかにしようとするものである。

#### 研修言語の概要

ソマリ語は、アフロ・アジア語族東クシ語派に分類される言語である。北部方言、ベナディル方言、マアイ方言の 3 つの地方語に別れ、うち北部方言が標準的なソマリ語である。ソマリ語には歴史的なつながりの深い国の言語（アラビア語、ペルシア語）や、植民地統治の元宗主国（英語、イタリア語）からの借用語が多くあるとされる。また、性、単数・複数、格の区別を高低区別であらわすという文法的な特徴がある。

#### 語学研修の内容について

現在、受入れ先機関であるナイロビ大学アフリカ研究所ではソマリ語の講義は開かれていない。したがって、研修期間の前半は同研究所から紹介されたナイロビ市内の語学学校でソマリ語の講義を受け、後半は調査地であるラガデラ県に滞在しながら実地研修を行った。

前半の研修では、60 分の授業を月曜日から金曜日まで毎日 2 コマ受講した。最初はあいさつや簡単な

日常会話表現から学習した。ソマリ語は、ケニアのほかの民族言語とはことなっていて幸いなことに、Martin Orwin による体系的な教科書が存在しており、授業はおおむねこのテキストにのっとってすすめられた。このテキストと講師による適切な解説のお蔭で、かなり高度なところまで文法的知識を学習することができた—実際に会話の場で応用できるかどうかはともかく。

後半の現地研修では北東州ラガデラ県内の集落に入りこみ、英語の話せる青年たちの助けを借りながらではあるが、実践的にソマリ語の表現を学んでいった。ソマリ語は北東アフリカで比較的広域に話されていることばである。したがって、テキストで用いられている表現と、ソマリア沿岸部生まれの講師が慣れ親しんだ表現、そして私が滞在した集落で用いられる表現のあいだに「ズレ」が生じることが、稀にはあるがあった。現地研修では、座学で学んだからといって表現に安心せずに、「実際にどのように表現しているのか」を意識するように心がけていた。

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

ソマリの人びとが多く住んでいる町ではよく、マカーヤドと呼ばれる細長い木の枝を骨組みとした小屋が道沿いに立ち並んでいるのが見られる。この簡素なつくりの小屋は、私にとってソマリ語を学ぶための「第二の学校」となった。

マカーヤドは、ソマリの男たちが集まる社交の場である。彼らはお茶や、噛むことで覚醒作用のえられるミラーの若芽を嗜みながら、何時間もそこでおしゃべりをする。私はときどきこの小屋を、ノート片手に訪れていた。ミラーを噛むと、ひとは普段よりおしゃべりになるようだ。彼らは、物覚えのわるい私の質問に対してそれこそ噛んでふくめるように答えてくれる、よき教師たちだった。「講義」のあとでしばしば要求されるミラーを値切るための交渉も、今思い返すといい勉強になった。



(↑ 採食中のラクダ)



(↑ 引っ越し中)

### 目標の達成度や反省点について

達成度について、基本的な語彙と文法構造、日常表現はおおむね理解できるようになったと思っている。しかし、ちょっと表現が複雑になるととたんに分からなくなるというのが現状である。知っている

単語でも、日常会話の流れのなかに乗せられるとそれとして弁別ができなくなる。

反省点としては、ナイロビでの語学研修のあいだ、学校以外の場所でソマリ語を実践する機会を積極的につくろうとしなかったことがある。現地でことばを身につけるといふ臨地研修のメリットを十分生かせなかったのではないか。後半の現地研究で話者とかかわりながらことばを習得していく過程のおもしろさ（としんどさ）に触れた今となつては、悔やまれることである。



(← ソマリ語の先生と)